

はじめに

「喘息と診断されているけれど、本当に喘息なのだろうか？」

「なぜ、どんな薬を飲んでもアレルギー反応が出てしまうのか？」

「なぜ、こんなに食べられないものが多いのか？」

「なぜ、こんなに匂いに敏感なのか……」

こういった疑問を持つ人に対する答えの1つが、「あなたは、もしかして化学物質過敏症なのではないか」ということです。

化学物質過敏症は、一般的なアレルギー反応とは異なるメカニズムで、多種多様な化学物質や環境条件、日用品や薬剤、食物からの微量な刺激にも敏感に反応して、蕁麻疹・鼻汁・咳・腹痛・下痢・めまい・流涙・吐き気・呼吸困難・聴覚過敏・視覚過敏といった症状を示す疾患です。その7割程度の患者さんに嗅覚過敏が認められるのも大きな特徴です。

「良い香り」とされる香料などにも敏感に反応してしまうため、化学物質過敏症は社会問題にまでなっています。これは、決して大げさな話ではありません。

化学物質過敏症は、正式には「多種化学物質過敏症（MCS：Multiple Chemical Sensitivity）」と呼ばれますが、本書では一般的な呼称である化学物質過敏症に統一表記することになります。

私が、医師として化学物質過敏症と向き合うきっかけとなったのは、アレルギー疾患対策基本法に沿って厚生労働省より中心拠点病院として指定された、国立病院機構相模原病院に勤務していた時にまでさかのぼります。

免疫学に興味があり、同院で2010（平成22）年から初期研修期間を過ごす中で、成人を対象とした喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー、スギのみではないカモガヤ・ブタクサ・ヨモギ・ハンノキなどの花粉症治療に従事する「アレルギー科医」の存在に目を向けていました。そこで、一般的なアレルギーとは異なる謎の過敏症の患者さんがいることを目のあたりにし、自分自身の無知・無力さを思い知らされたのです。

毎日の食事や、生活環境における日用品に対してまでも過敏症状が起こり、自宅でも安

心して過ごせず、生き地獄のような生活を日々送っている患者さんがいたのです。

困り果てて医療に頼るものの、いろいろ検査をしても異常所見は得られない。「気にしすぎ」と言われたり、「重症アレルギー」だと誤診されたりして、不要な治療、過剰な治療を受けている……。

まだ駆け出しではありましたが、自分はそのような現実を知り、このことは真のアレルギーとは何なのかを理解しているアレルギー科医が取り組まなければいけない問題なのではないかと痛感しました。そこで、当時からの上司である谷口正実先生と化学物質過敏症の研究を始めたのです。

これまでに、多くの患者さんや先輩研究者の協力を得て、化学物質過敏症に関する大規模な疫学調査や、腸内細菌叢解析を行ってきました。腸内細菌叢は、腸内に約1000種類、100兆個も生息する細菌の群のことで、さまざまな病気と関連します。

患者さんに貢献するための科学的な研究を行っている、まだまだ化学物質過敏症の理解が進まない現状に直面します。科学的研究を重ね、他分野の研究者と協力しながら、診断・治療・予防方法を確立することで、この「よく分からない疾患」に対しての適切な理

解が進むと考え、専門的な医療の分野で、さまざまな客観的な発信をしてきました。

同時に、高血圧や糖尿病といった疾患と同じようなレベルで化学物質過敏症への理解をより多くの人に広めるためには、分かりやすくまとめた一般書が必要であると考え、本書を執筆するに至ったわけです。

本書は、患者さんが過敏に反応してしまう人工香料を製造したり、製品に使用したりしている企業を一方的に否定するものでもなければ、自然香料を礼讃するものでもありません。現在の環境医学において、化学物質過敏症という疾患に対する科学的な説明を、できるだけ分かりやすく中立的な立場で記述することに努めました。ちなみに、環境医学とは、環境が生体にもたらす疾患の治療や予防について、基礎と臨床とが一体となって解明する医学分野を指します。

現在の医学では、できる限りバイアス（先入観、偏見）を排除し、多くの患者さんを対象に行う臨床試験に基づいた科学的根拠（エビデンス）が重要視されます。

残念ながら、化学物質過敏症の場合は、大規模な臨床試験に基づく科学的根拠がまだまだ乏しいのが現状です。そのため、あくまでも現段階における可能な限りの科学的説明を

もとに、これからもひたすら科学的根拠を積み重ねていくことによって、この疾患に苦しむ患者さんに資することができればと願っています。

第1章では、化学物質過敏症がなぜ誤診されやすいのか、どのように誤診されているのか、その現実を紹介します。これはなにも、「誤診を告発する」ことがねらいではなく、確立された治療方法がないこの疾患に対して、早期の正確な診断がどれほど重要であるか、また誤診による不必要な治療がどれほどの弊害をもたらすものなのかを強調したいがためです。

第2章にて、化学物質過敏症とはいったいどういう疾患なのかを詳しく解説します。科学的な説明はまだ十分ではないのが現状ですが、「このよく分からない疾患は何なのか?」という、患者さん自身のモヤモヤとした気持ちを少しでも晴らすだけでなく、周囲の人にとっても、この疾患に苦しむ患者さんを理解する助けになることがねらいです。

化学物質過敏症をひと言で言いあらわすキーワードは、「脳過敏」です。気管支喘息は気管支が敏感な疾患、アトピー性皮膚炎は皮膚が敏感な疾患であるように、化学物質過敏症は脳が敏感な疾患です。「脳過敏」を「精神疾患」と言ってしまった方がいいのかどうかの

議論についても触れるつもりです。

第3章では、化学物質過敏症が合併しやすい他の疾患を解説します。合併症を適切に治療していくことが、化学物質過敏症自体の悪化を防ぐためにも重要になるからです。

第4章では、どのように診断するかと、どのような治療法があるかについて解説しますが、まだまだ科学的根拠が乏しい現状には、医師として^{じくじ}忸怩たる思いです。今のところ、保険が適用される治療法はありませんが、困っている患者さんに向き合っていく中で、できる限りの改善策、治療法を提案していくのが医師としての役割です。化学物質過敏症は予防するのが最も望ましいのですが、発症したとしても、患者さんに対する日々の治療を積み重ねていくことで、やがては科学的根拠をもとにした治療法が確立されるというのが理想です。

第5章では、実際の医療の場における患者さんにとっての重要な視点と、医療従事者が重視する点を紹介します。科学的根拠の乏しさによる化学物質過敏症への理解不足から、患者さんと医療従事者との間で、お互い心をすり減らしてしまう現実がしばしば生じています。お互いの視点を理解しようという心がまえを持つことによって、不毛なストレスの

軽減につながられるのではないかと期待しています。

第6章では、化学物質過敏症の日常診療はどのようなかたちが望ましいのか、疾患のメカニズムの解明につながるどのような研究が行われているのかについて、他の分野での研究も交えて今後の課題と展望を述べます。

化学物質過敏症という疾患の科学的根拠が乏しいがゆえに、要因や原因となる化学物質を製造する企業对患者さん、あるいは難しい診療・ケアを行う医療従事者对患者さんという構図が存在しがちですが、それを対立の構図として捉えるものでは決してありません。本書を通じて、化学物質過敏症という疾患の科学的な理解が今後さらに進み、罹患りかんされた方の苦痛が軽減し、発症の予防にもつながる一助になればと考えています。